

運命の番（つがい）は獣人（じゅじん）のようです

登場人物紹介



フィアナ

フィンレイの姉。
ゴールデンギープ族の
里長。



ダヴィッド

人間に対する
獣人反乱軍のリーダー。
グレイウルフ族の里長。



クラウス

天馬を探している勇者。
熱血漢で基本的に親切。



イザドル

勇者と一緒に旅をする
吟遊詩人。
綺麗な笛を持ち、
獣人を憎む歌を歌う。



フィンレイ

ゴールデンギープ族の獣人男性。
ルカに傷を治療されて以来、
彼女のことが気になっている。



さくらるか
佐倉瑠香

天涯孤独な大学二年生。
不思議な少女たちに
親切にしたせいでか、
異世界にとばされてしまった。
トリップの際に、彼女たちから
魔法を使える能力をもらっている。
どうやら、獣人のフィンレイが
「運命の相手」らしく——!?

第一章

「ん？ これ、落とさなかつた？」
サークルの飲み会からの帰り道、私——佐倉瑠香は、二人組みの少女の後ろに落ちていた箱を拾つた。けれどそれを返そうとしても、少女たちはなぜか受け取つてくれない。

拾つたのは、正方形の宝石箱のようだつた。金細工で唐草模様が描かれているフレーム、蓋や側面には赤や青、緑の宝石みたいな石が嵌め込まれている。

石が全てイミテーションだとしても、ある程度の値段はする代物に見えた。
私が落としたものではない、はずだ。

……今夜はクリスマスだから、サプライズのプレゼントかもなんて、酔っ払い的思考で考え、一応、佐倉瑠香様へなど、自分の名前が書かれた手紙がくつついでいないか、確認してみた。けれど手紙どころか、箱の中には何も入っていない。

そもそもよく考えたら、プレゼントをくれる人物に心当たりがなかった。一瞬、直前まで一緒に酒を飲んでいた同じ大学の後輩男子の顔が思い浮かんだけれど、そんな関係じやない。
「えーと、あなたたちが落としたんじやないの？」

立ち去るでもなくその場に突つ立っている、奇妙な雰囲気の少女たちを見やる。

何となく彼女たちが箱の持ち主のような気がしているのだが、彼女たちは、何かがおかしい。

私が酔っているからそういう感じだだけかな？

私は飲み目的の旅行サーケルに入っている大学一年生だ。文系で経済学部、夢はない。

今日の飲み会に女子は他に一人いただけで、参加者のほとんどが男だった。だからといって胸がときめくような何かが起るわけがない。

クリスマスなので恋人を持つ部員は現れず、独り身同士の傷の舐めあいのような会だった。

もつとも、独り身にも色々ある。家に帰れば家族がいる人はいいじゃないか。電話をかければ家族に繋がるのも幸せなほうだろう。

私は待っている相手も電話をかける相手もいないから、後輩の男子とお店が終わるぎりぎりまで飲んでいたのだ。

ちなみに一緒に飲んでいた後輩の彼は、家で両親と兄弟姉妹、おじいちゃんおばあちゃんまでが待っている大家族の一員だ。けれど、今日は彼女と出かけると家族に触れ回ったあげくその彼女に振られたため、飲み会に参加した哀しい事情の持ち主である。彼のことはキングオブ番外と名付けよう。

件の彼女は二股していて、彼はキープくんだつたらしい。念のためにお伝えすると後輩の彼は学年は下ではあるが、二十歳は越えている。

泣き喫^{むせ}ぶ彼はベロンベロンだったため、先ほどタクシーに乗せて帰したところだ。彼のスマホに

私のツーショット写真を入れておいてあげたので、彼女に振られたとご家族に打ち明けるのが辛すぎたら、それを見せればいいと思う。明日の朝には別れたことにしよう。

これだけデイープな時間を過ごした後なので、当然時間は深夜零時を回っている。

つまり——こんな時間に何をしているんだろう、この少女たちは？

「その器は差しあげます、あなたに」

二人の片方、金髪の少女が鈴を転がすような声で言う。全く意味がわからない。

クリスマスだからプレゼントって？ 見知らぬ人間に贈るには少々お高そうに見えるけれど、納得いかない私に、金髪の少女が続ける。

「あなたをあちらへ連れていく代わりに」

彼女は一体何を言わんとしているのだろう。……何だか怖くなってきた。幽霊的な意味で。

気味が悪いなと思いつつも走つて逃げなかつたのは、手の中に宝石箱の確かな感覚があるせいだ。これを返してからでないと心置きなく帰れない。

それにしても、こんな道ばたにいるのが似合わないほど美しい少女たちである。

二人の美少女は双子のようで、顔がうり二つだ。

しかし髪の色と目の色が違っている。一人は金髪に金の瞳、もう一人は黒の髪と瞳。

不思議なことに、顔立ちを見てもどちらが染めていて、どちらがカラーコンタクトをついているのか、わからなかつた。彼女たちは国籍が思い浮かばないのでした。

日本語を話しているので日本人なのかもと考えられるが、微妙に話が通じていない気がする。母

国語が日本語ではないのかもしない。

「えーと、こんな夜遅くに出歩くのはよくないよ。寒いでしょ？」

彼女たちはいくつくらいなのだろうか。大きな瞳が顔面のほとんどを占めている美少女たちは、小学生くらいにも見えるし、妙に艶あやを帯びた雰囲気のせいで、もつと大人な気もする。

それはともかく、二人とも薄着ははだつた。

金髪金目の少女は、白いファーの縁取りのついた白いケープに白のワンピース。黒髪黒目の少女は、黒いファーの縁取りのついた黒いケープに黒のワンピースといった姿だ。二人ともケープと同じ色のブーツを履いている。

どれもこれもおしゃれが優先で、防寒を全く意識していない。

二人の親は何のつもりだ。子どもはお人形じゃないんだぞ。

「すごく寒いんじゃない？ お姉ちゃんのマフラーあげるから持つていきなよ」

「えっ？」

私のマフラーはちょうど長いデザインのものだ。戸惑う一人の少女をくつつけ、その首にぐるぐるとマフラーを巻きつけていく。

膝ひざまでありそうな金と黒の豊かな髪の毛を巻き込み、とても可愛らしく仕上仕上がつた。

二人の少女は目をまん丸にして、私のなすがままだ。

「あと、この箱を返すね」

「一人で巻いて帰りな」

すかさず箱を持たせようとすると、金髪の少女が素早く身を引いて箱の返却を拒否した。黒髪の少女の首が軽く縮まる。大丈夫？

「いいえ、あなたに差しあげるものです」

「あと、これもあげます」

あげく、黒髪の少女に新たなプレゼントを押しつけられる。

包装のされてない金色のパンプスだ。とつさにシンデレラの靴が思い浮かぶ。

ガラス製じゃないけれど、何かの舞台で使う小道具道具だととか？

それについても、黒髪の少女は靴を持っていないのに、どこにこの靴を隠し持っていたのか不思議だ。

高額そうな輝きなので、落としたらまずいと思つた私は、受け取ってしまった。

けれど、こんなものをもらう理由がない。

いや、今日はクリスマスなんだけれど。クリスマスなのに私はぼつちなわけなのだけれども。「運命に会わせてあげます。あなたの運命の、番ばいです。お礼おごです」

「きっと役に立ちます。この靴は、あなたを助けます。お礼おごです」

マフラーがよほど嬉しかったのか？ よくわからなければ、二人はお礼おごをしたいらしい。

けれど、運命のツガイって何？ 靴が私をどんなふうに助けてくれるの？

ほんやりと考え込む私を置いて、二人は柔らかそうな白い頬を寄せ合いマフラーを握りしめて走り出した。

「いや、待つてつてば——つて、ぎやつ」

慌てて追いかけると、角を曲がったところで待ち伏せていたらしい黒髪の少女に突き飛ばされる。

何で？

「一番初めに出会った者が、あなたの運命」

「金色の靴は、あなたを助ける者を遣わす」

どちらがどっちの少女の言葉なのやら。

二つの言葉は重なり、似たような声が二重に響く。そして、何を言っていたのかも定かでなくなつた。

アスファルトに倒れ込みながら、私は黒髪の少女がうつすらと笑っているのを見た気がした。寄り添う金髪の少女のほうは、憐れみに満ちた目でこちらを見ていたような——

§ § §

「あいたつ!?」

倒れた拍子にアスファルトで右肘を打つた。そう思つたのに、地面がアスファルトじやない。

「ごつごつ……」

持つていた宝石箱と靴を庇つたために、私は肘を痛めてしまつた。

それはともかく、地面が凹凸のある灰色の岩だ。

「ここ……どこ？」

涙目、涙声になつたのは、肘が痛いからだけじゃない。わけがわからないからだ。

私は夜も更けた暗い住宅街を、アパートに向かつて歩いていたはずだ。

私が一人暮らしをする安アパートの辺りに、こんな景色の場所はない。だつて都会の真ん中だぞ、おい。

そこは、どう見ても洞窟だつた。

私は灰色の地面から身体を起こす。激しく転んだ割に、右肘を少し擦りむいただけですんでいる。周囲は薄暗かつたが、うつすらと様子が見えた。岩と茶色の土の壁から木の根らしきものがうねりながら隆起し、地面まで垂れ下がつている。

天井の隙間から地上の光が漏れ入つてゐるようで、下手に暴れたら天井が崩落するかもしれない。そもそも、どうしてこんなことに？

誘拐されたの？ 私が？ え？ いつの間に？

黒髪の少女に突き飛ばされて転がつたのは今だ。その後、気絶した覚えはない。

念のため、自分の服を確かめてみた。

「あれ、箱どこ行つた」

服は変わつていなかつたものの、どうしても返却したくて、肘を負傷しても守り通したはずの箱がない。

目の前にはごつごつとした地面だけだ。箱が消えた。

何も守れなかつたとか、私の肘が可哀想すぎる。

「いやつ……あれはもしかして……？」

岩の陰が明るいと思つて視線を向けると、黄金の靴が落ちていた。

守れたものもあつたらしい。ほんの少し満足感を覚える。

これだけでも少女に返そつと、肩に引っかかつたままのトートバッグに入れておいた。

さて、それでは本題に戻ろう。

「ここ、どこだよー！」

叫ぶと、予想外にも返事が来た。

「誰かいるのか？」

「人!?」

先ほどの少女たちではない、男の声だ。

デコボコに足を取られながらも声の響いたほうに行くと、向こうも私のところへやつてきていた。

彼は私を見て驚いた顔をする。

でも、たぶん私のほうがびっくりしているよ。

だつて私が見つけたのは、人ではないかもしないのだ。

「……角？」

真つ白、いや、白銀とも言えそうな色のふわふわの長い髪。そこから突き出す一本の金色の突起が、彼の手にする松明の光を反射して輝いていた。まるで月のような艶があるそれは、円を描いて

頭の側面にぴつたりとくつついている。
美しくも可愛らしい、まごうことなき角だ。
そして、私を見下ろす、戸惑いを浮かべた精悍な顔つきは、彫りが深く、整っていた。
松明の明かりで銀色の睫毛が頬に濃い影を落としている。すごい。睫毛にエクステしてるの?
瞳の色は茶だろうか、金だろうか。洞窟が薄暗くてわからないけれど、松明の火の明滅を映して
鱗粉を散らしたみたいに輝いている。

「ヒューマンの娘がどうしてこんな場所にいる? ……その格好は何だ?」

彼が私に問うた。

けれど、ここがどこか想像すらできないし、どうしてこんな場所にいるのかは私が一番知りたい。それに、私が着ているのは普通の私服だ。^{うらきもち}トレーナーにジーパンにローヒールのパンプス。その上に無難な黒のダッフルコートを羽織っている。マフラーはあげてしまつたので、ない。クリスマスを過ぎる若い女の格好ではないかもしないが、「何だ?」と言われるほどひどくはないと思う。

「奇妙だが、上等な仕立ての服だな。女神の戦士ではないのか? 迷い込んだのならば、すぐにこから出なくては——」

彼は私の腕を掴もうとして、熱いものに触つたかのように、寸前で手を引つめる。

「えつ、何? 私の腕に何かついてた!?

「いや、そうではなく……俺に触れられるのは嫌だろ?」

彼は落ち込んだように手を下ろす。誰かに陰口でも叩かれたのだろうか？

「……ここは魔物の巣だ。見ての通り俺は獣人だが、この状況で毛嫌いするのはやめてくれ」「はあ……」

「俺はフィンレイ・ゴールデンギープ。外まで連れていくから、ついて来い」

「フィンレイさんはそれだけ言うと、私に背を向けて歩き出した。」

状況に流された私は思わず、彼について行く。見知らぬ人について行っちゃいけませんって感じだけれど、他に選択肢がない。

これは現実なのだろうか？

酒に酔っているのかな——とも考えたものの、おそらく違う。

気づくと住宅街では感じっていた心地のよい酩酊感が、さっぱり消えている。こんなに早く酔いが醒めるのはおかしい。

そもそも、どんな方法を使えばこんな自然洞窟に一瞬で迷い込めるのか、という話だ。

そういえば、夢か現か、あの少女たちは何と言つていたつけ？

金髪の少女が気になることを口にしていたよな……

——確かに、運命の番。

「……初めて会った人が？」

「何だ？」

「えっ!? いえいえいえ、何でもないです！」

思わず独り言が零れ、不審な顔で振り返られた。その横顔も整つていて麗しい。

こんなイケメンを勝手に自分の運命の人には認定しては、罰が当たる。

番つてそういう意味でしょ？ 主に動物のカップルに使うべき表現だけれど。

そんなことより、現状の把握をしなければ。

少女たちが現れた頃は確かにまだ酩酊感があつた。つまり彼女たちは、酔った末に見た幻覚だろう。

酔つ払った私はどういうルートを辿ったものか、田舎にやつてきてしまつたのだ。そして洞窟を見つけ、喜び勇んでそこに入つたに違いない。マフラーは双子の地蔵にでも巻いたんだ。

「……えーと、完成度の高いコスプレですね？」

私はフィンレイさんをそういう類の趣味の人だと結論づけた。

あいにく彼が扱するキャラクターはわからないけれど、情熱は痛いほど感じる。

この近くでコスプレの撮影会をしているのかもしれない。邪魔はしないので、最寄りの駅までの道だけでも教えてほしい。

そうお願いしようか考へていると、彼が答えた。

「コスプレ？ あなたは、一体何を言つているんだ？」

「何つて——つ!? えっと、頭のそれ、すごい血糊ですね」

松明の灯りに照らされた彼の額の右側に、傷ついた肌を表した緻密なメイクが施されていた。赤い血糊も真に迫つていて、素人の技術とは思えない。

「まさかテレビドラマとか、映画とかの撮影中だつたりします？」

それならぜひとも野次馬してから帰りたい。フィンレイという名も役名なのだろうか？
けれど、松明に照らし出されるフィンレイさんの顔は、困惑に彩られていた。

「もしかして、シークレットだつたりしましたか？　それならSNSに情報を流さないと約束します！　情報解禁を待ちますって！」

「……本当に、あなたは一体どうしたんだ？　大丈夫なのか？」

困惑と悲哀を混ぜた昏迷を極めた表情で、フィンレイさんが何かを心配してくれている。私の様子を窺うように、その整った顔を近づけてきた。

「痛そう……これが偽物だなんて信じられない」

「偽物？　これは本物の傷だが、そんなことより——」

「そんなことより！？　え？　待つて。それ本当に怪我をしてるの!?」

「あ、ああ？　確かにそうだが」

「それじや頬にまで流れるそれは、血糊じやなくて本当の血!?　どうして怪我をしてるの！」

私は慌てて鞄を漁つた。絆創膏が入つていたけれど、傷口を全て覆える大きさのものはない。

改めて見ると傷口の長さは十センチ弱。縫つたほうがいいレベルだ。

こんな傷を負つて頭に角をつけたまま平然とした顔で洞窟を歩いている人がいるとは、思わなかつたよ！

「向こうに地下へ続く道があるんだが、その天井から下がる鍾乳石にぶつけてな」「鍾乳洞があるの？　へえ……ここつて無断で侵入してオーケーな場所？」

「まさか教会へ届け出さずに入つたのか？」

「あっ、教会？　そういう場所なの？」

神秘的な雰囲気に惹かれるのか、昔から鍾乳洞の中には神社が造られている場所がある。ここは教会が管理している敷地のようだ。

そんなところにコスプレ姿で侵入して怪我したなんてバレたら、相当怒られるんじゃない？
私もフィンレイさんも上手いこと誤魔化さないといけないってわけだ。

「とりあえず、怪我を見てください。ほら、届んで」

たまたま持っていた水筒の水でハンカチを濡らして、フィンレイさんの顔に手を伸ばす。けれど、彼が全然膝を折つてくれないから、傷口は遙か高みだ。全く手が届かない。
「血を拭くだけだから！」

「……俺を治そうとしているのではなく、魔物をおびき寄せるのではないかと、血の匂いが気になるということだな？　そうであれば、理解できる」

「何言つてんの？」

「中二病なの？　それともコスプレしているアニメか漫画の世界観を守つていいのかな？」
付き合つてられないとは思うものの——その場に膝をつくフィンレイさんの動きは美しく、見とれてしまう。油断なく周囲を窺いながらの、よどみない所作だ。

しゃがんだ後は、その金の瞳でまっすぐ私を見据え、一挙一動を監視していた。

「あく、痛そう。これは病院へ行くべきだね。保険証持つてきてる?」

「……あなたが何を言つて いるのか、わからな い」

「いや、ホントにお医者さんに診せたほうがいいよ。お金が足りないなら、えーと、少しなら私も出してあげられるから」

ここで会つたのも何かの縁だ。正直フィンレイさんに出会えていなかつたら、知らない内に謎の洞窟にいるなんていう信じられない展開で、迷子になつていていたかもしない。

だから私を見つけてくれた彼には感謝している。

「うーん、一万円ジャストと二千円……まあ、応急処置なら大丈夫でしょ。後で保険証を持つて行けばいくらか戻つてくるはずだし、そしたら返してくれるとありがたいなあ」

貸してはあげられるけれど、プレゼントするのは少々苦しい。貧乏学生なのでね。

けれど、フィンレイさんは頷いてくれなかつた。

「……あの、お金を返せるあてがないなら無理にとは言わないよ? それで病院を諦めるとか言い出されるほうが辛いから」

「あなたは……自分の名前はわかるか?」

「えつと、親切な私の名前が知りたいという意味かな? 佐倉瑠香だよ」

「ルカ、俺が『何』だか、わかるか?」

「何、つて。え? な、何かあるの?」

「わからないのか……そうだろうと思つたよ。あなたの記憶は混乱しているようだな」「どうしてわかるの? 確かにこの洞窟に入つた覚えが全くなくて、困つてて」

「道理で。俺に触れるその手が優しすぎる」

彼は顔を歪めて私の手を押し返す。

いや、そんなに返済が気になるならハンカチはあげるので、素直に拭かせてほしい。
「こら、痛いのは見ればわかるよ。大丈夫、優しくしてあげるから、傷口を見せてよ。ね? 汚れているみたいだから、私にやらせてくれたほうが絶対にいいよ」
傷口に小石が入り込んでいたらと考えるだけで、頭痛がしてくる。

すると、フィンレイさんはさらに顔をくしやりと顰めた。

「あなたは——つ、まずい! 魔物が奥から……! 逃げろ!」

「うん?」

「呆けていないで、あちらに走れ! 生きながら食われたくなればな!」

猛獸でもいるのだろうか、この洞窟。意味がわからないけれど、生きながら食べられるのは勘弁だ。

私はとりあえず走つた。

けれど暗い洞窟の岩壁に右手の甲を擦り、痛さのあまり立ち止まる。

先ほどから私の身体の右側がダメージを受け続けている。どうしてこうなつた。

「何でこんな——」

愚痴ぐちろうとしたところで、置いてきた青年のほうから甲かんだか高く、どこか悍おぞましさのある鳴き声が響いてきたので、慌ててもう一度走り出した。

今のは、何!?

横腹が痛くなる頃、ようやく道の先に明かりが見える。洞窟の終わりだ。

「戻ってきたのか、獣人? いや……おまえ、どこから出てきたんだ」

洞窟の入り口で、二人の男が困惑顔で私を出迎えた。

一人は時代錯誤じだいさくくな、奇妙に豪奢ほうしゃな鎧を身につけた精悍せいかんな顔つきの青年だ。

もう一人もまた、時代錯誤じだいさくくな旅人風の格好の美貌めいめうの青年だった。

ねえ、君ら一体こんなところで何してんの?

第二章

「何だおまえ? 獣人の仲間か?」

「じゅうじん?」

洞窟の外で私を待ち受けていた二人は、訝しげな顔で私を睨んだ。

「白い毛並みの獣人だ! 仲間じゃないなら、なぜ魔物の巣の中にいた?」

「クラウス様、彼女は魔族ではありませんか? あの獣人がクラウス様を陥れるために、私たちをこんな邊鄙へんびな場所に誘導していたのでは……」

「ここを調べると決めたのはオレだ。誘導なんてされているわけがない」

「ですがクラウス様、勇者たるもの、常に獣人には警戒しなければなりませんよ」

「まあ、それはそうだが」

深刻そうにわけのわからないことを話す二人に、私は納得する。

なるほどこれは、コスプレイヤーの合わせというシチュエーションだろう。漫画かアニメのキャラクターの格好で仲間たちが集まって、設定に合わせたロールプレイをやっているに違いない。すごい迫真の演技、渾身のなりきりぶりだ。口を挟めない雰囲気である。

フィンレイさんが出てきて事情を説明してくれるまで、待っていたほうが賢明かもしれない。

それにしてもこのコスプレイヤー一人とも、すこぶる顔がよかつた。趣味を貶めるわけではないけれど、こんなに話が通じないのは意外だ。

勇者プレイをしているらしい青年は、短い黒髪に精悍な顔つき、その勇者に付き従うプレイをしている人は緩くウェーブのかかった金髪と彫刻めいた美しさの持ち主だった。

二人とも日本語ペラペラなのに、外国の方に見える。

不意に黒髪のほうが私に質問した。

「まあいい……オレは女神の教会に正式に認められた勇者、クラウス様だ！ いずれ魔族の王たる魔王が立った時に備えて、天馬を探す旅の最中だ。おまえの名は？」

「はあ？」

「おまえの名前は何だと聞いているんだ！」

いや、それはわかっているよ。でもね、どこでコスプレを楽しむのも自由とはいえ、それに私を巻き込むのは違うんじゃないだろうか。

「君、名乗れない後ろ暗い事情でもあるのかな？」

従者プレイの麗人は、暗黒微笑を浮かべてみせる。

この二人は、ロールプレイをしないと話せない、そういうタイプの人たちなのだろうか。こんなにイケメンなのに、全力で黒歴史を製造中らしい。

あまり触れないでおいてあげよう。私はロールプレイなんてしないけどね。

「えーと、私は佐倉瑠香です。あなたはクラウスさんで、あなたは——」
「私はイザドル。勇者様と共に旅をさせていただいている、吟遊詩人」

「はあ、どうも」

あともう一人、洞窟の奥から猛獸が湧き出してくる設定で遊んでいたのが、フィンレイさん。三人は、お友達に違いない。

それにもしても、フィンレイさんの演技が真に迫っていたせいで、本気でビビらされてしまった。彼は何をしているのか、中々洞窟から出てこない。

「そういえば、ここってどこだかわかりますか？」

「アルソンの南だが」

「ある？」

「町の名前だ。そんなことも知らないでここにいるのか？」

クラウスさんが呆れ顔で言う。

シラフで勇者を名乗る人に呆れた顔をされるだなんて……とは思うけれど、自分のいる場所がわからない人間も相当である。これでは酒に溺れたクズの所業だ。

……お互い様ということにしておこうか。

しみじみと考え込んでいた時、突然クラウスさんに突き飛ばされた。

またか！ 私の身体をバレーボールのように扱うのを、全人類にやめていただきたい。
「だけ！ 獣人が凶の役目を果たしたみたいだぞ！」

彼は楽しげに叫び、腰に佩いていた長剣を引き抜いた。様になつてゐる。

イザドルさんもまた、手にしていた杖を洞窟に向かつて構えた。こちらも決まつてゐる。

どこかにカメラがあるのだろう。撮影の邪魔にならないよう、木陰にでも隠れていたほうがいいのかもしれない。

私は自発的に下がつて、彼らが厳しい顔つきで睨む洞窟を眺めた。

すると、中からフィンレイさんが出てくる。それを見た私の口から、ひえつと間抜けな声が出た。

彼の姿があまりにも凄惨だつたのだ。

「えつ!? それ血糊だよね」

「無様な姿だな、獣人！ 邪魔だ、さつさと引け！」

混乱する私をよそに、よろよろと歩いてきたフィンレイさんをクラウスさんは邪魔そうに押しのける。無造作に身体に触れられたフィンレイさんの顔が歪んだ。

本当に痛みを感じているようにしか見えない。私は慌てて彼に近づいて、ぐらりと傾いだ身体を支える。

よく知る鉄錆の匂いは、間違いく血だ。

彼は全身真っ赤だつた。これが全て本物の血だなんて、信じられない。

「大丈夫!? どうしたの、これ！ 怪我……たくさんしてる！」

「よせ……俺のことは、放つておけ」

「放つておけるわけないでしょ!? 何言つてるの……何でなの」

どうしてこんな酷い怪我をしているのだろう。

私の問いに対する答えは、すぐに洞窟から這い出てきた。

「げつ……あれは何!?」

「魔物、だ。……わからないのか？ 魔物のことまで」

思わず叫んだ私に、フィンレイさんが応える。怪我をしているのは彼のほうなのに、私を気遣わしげに見下ろしていた。

わからぬことが多すぎて怖くなつてきたけれど、こんなに酷い怪我を負つてている彼に心配をかけるわけにはいかない。奥歯を食いしばつて、疑問は自分の中に一時封じ込める。

「私があなたに何かしてあげられることはある？」

「いや……ない。俺に構う必要はない」

「なくはない！」

「一応聞くが、魔法のことはわからないんだろうな？」

「魔法？」

「……ああ、そういう反応が返つてくると思つたよ」

フィンレイさんは複雑な笑みを浮かべた。どこか嬉しそうな、そんな自分を自嘲するような笑みだ。一方、クラウスさんははしゃいだ声をあげる。

「勇者クラウス様の生きている内は、この世に魔は蔓延れないぜ！」

洞窟から出てきた獵猛そうな、変な生き物たち相手に剣をふるえるのが嬉しいらしい。

この変な生き物に似た姿の動物をあえてあげるなら鳥かもしれない。けれど大型犬よりも大きく、くちばしにあたる部分にびつしりと鋭い牙が生えている。それが複数いるのだ。

異形たちのほうも、私たちの姿を見て喜んでいるようだつた。きっとその無数の牙を使えるのが嬉しくて仕方がないんだろう。クラウスさんと二人でよろしくやつてほしい。

そんな化け物を、クラウスさんは剣一つで難^{かうす}ぎ払つた。

「素晴らしい剣捌^{けんさば}きだよね、彼。間違^{まちが}いなく【人間】の中で随一^{すいいち}の剣の使い手だよ。女神の教会が

勇者として認めるのも頷ける。ねえ、そう思うだろう?」

いつの間にか私の横まで下がつていたイザドルさんが同意を求めてくるけれど、半分くらい何を言つてゐるのかわからない。

曖昧^{あいまい}に笑つて小首を傾げてみる。そんな日本人のお家芸を使つた私は、睨^{にら}みつけられた。

……もう現実を受け止めるしかない。

この人たちはコスプレの合わせをしているわけではなかつた。銃刀法に完全に違反している刃物を所持しているのも、アホだからではない。

「ここは、勇者のパーティがいてもおかしくない世界つてことなの……!?」

つまり、クラウスさんは本当に勇者なのだ。そしてイザドルさんは本当の勇者に従う^{さなゆう}吟遊詩人^{しじん}。

「芬^のンレイさんは獣人だ。——この角は本物なのか!?

「おい、俺の角に触れるな……」

「あ、ごめんなさいね。ついつい」

一人で立つてゐることもできない怪我人を木陰^{こかげ}に座らせ、身体を支えるにかこつけて、彼の角を欲望のままに撫^{なな}いでしまつた。

すべすべつるつるの金色の角は、本当に頭から生えてきていて、生命の神秘を感じる。

「さつさと離れておけ。クラウスが魔物を屠^{ほふ}り終えて戻つてきたら、あなたは困つたことになる」「困つたこと?」

「ああ。それに……俺たちについてくるのはよしておけ。アルソンにも立ち寄るな。別の町に行け」

「いや、それは無理だと思う。一人じや何もわからないもの。絶対にあなたたちについて行くよ、私」

だつてことは、おそらく異世界。それも凶暴そうな魔物が出る。

芬^のンレイさんのような屈強な男性が、こんなにも傷だらけにされてしまうような相手だ。私が一人で遭遇したら、たぶん五秒で死ぬ。

「……確かに、あなたで街道を行くのは、無茶な話か」

「うん、そう思う……そもそもどうして私を邪険にするの? その、そんなにご迷惑になる?」

ならないわけはないだろうけど、こんな場所に放置していくほど迷惑なの? 助け合いの精神とかは、ここには存在しないのかも知れない。

「まあ、私のことはいいよ。ともかく、あなたの手当^{あて}でが一番大事だね。救急用品とか、持つてる?」

「ないな」

「そうなの……それじゃとりあえず、汚れているところだけ拭かせてね」

そつと手を伸ばす。さっきはものすごく嫌がられたから。

ここが異世界だなんて考えてもいなかつたので、この世界的にあり得ない発言をしていたのかも
しない。ヤバイ女だと思われていたらどうしよう。

けれど、今度は嫌がられなかつた。

彼は不思議と幼い目で私を見上げてくる。傷口に触れるため支えようと頬に手を当てるべく、す
りつと指にすり寄られ、心臓がギュンと音を立てた。

イケメン、一体どうした!?

それを見ていたらしいイザドルさんからかわられる。

「随分、獣人と仲がいいんだねえ、君?」

「ツ！」

「クラウス様が魔物を殺し終えたら、次は怪しい君の番だよ、ねえ?」

イザドルさんが顔を近づけてきて、意味深に言う。

金色の長い髪が波打ち艶めいている白皙の美貌は、横から見ても麗しい。

アーモンド形の目を細めて微笑む表情も美しいけれど、今のつてプラックジヨークよね? 次は
私の番って、斬られる番のこと? 怖すぎじやない? この世界のユーモアなの? ?

するとフィンレイさんが、私の手をバッと払つて押しのけた。

「あいたつ」

「つ、すまな——」

謝ろうとしてくれた彼の言葉は、最後の魔物を斬り終えたクラウスさんに遮られる。

「質問の続きだ! ——おまえはどうして魔物の巣にいた?」

クラウスさんは、洞窟から出てきた何十体もの魔物を斬り終えた血みどろの剣を右手にぶらぶら
させたまま、私のほうにやってきた。

剣が汚れているため綺麗にしてからでないと鞘に入れられないんだろうけれど、私に向けないで
いただきたい。先端恐怖症になりそうだ。

けれど、下手にそんなことを口にしたら、この人は私を斬る気がする。

怪しまれないように、しかし万が一怪しい行動をしてしまつても多少は許されるように——私は
先ほどフィンレイさんにかけられた言葉を手がかりに、答えた。

「実は頭を打つてしまつて、記憶が曖昧なんですよ!」

「おお! つてことはもしかしておまえ、魔物を倒しにきた女神の戦士じやないのか? 戦いに來
たとは思えない格好だが、魔法使いならありえるな。頭を打ったのは魔物との戦闘でか?」

「そうそう、たぶんそう! 何せ記憶が曖昧なので、はつきりとはわからないですけれどね!」

——女神の戦士、魔法使い、魔物。

クラウスさんがノリノリで私の設定を補足してくれる。彼の口から出てきたこのキーワードを心
に留めておこう。

私は女神の戦士で、魔法使いで、魔物との戦いの最中に頭を打つて記憶が混乱している！

けれど、イザドルさんが冷たく私の言葉を否定した。

「この女は怪しいですよ、クラウス様。殺しておいたほうがいいのでは？」

確かに私が怪しい女なのは間違いないけれど、殺されるほどの悪事を働いた覚えはない。

「いや、女神の戦士ならば、その負傷は^{なんたる}使えるべきものだ。オレたち女神の信徒は助け合わなきやいけないぜ」

クラウスさんが胸を張つて言う。さすが堂々と勇者だなんて名乗る男である。何だか様になつていたせいか、イザドルさんは溜め息をついて諦めてくれた。

「……仕方ありませんね、クラウス様がそうおっしゃるんでしたら」

その後、イザドルさんはクラウスさんに見えないように私を睨んできた。

何だろう、今の反応。もしかするとイザドルさんはそつち系？

別に人の恋路を邪魔するつもりなんてないので、敵視しないでほしい。私はそれどころじゃないからね！」

「一先ず町まで一緒に行くか……って、いつてえ！ オレ怪我してる！」

「クラウス様が手傷を負われるなんて珍しいですね」

「マジだよ！ このオレ様としたことが！ 治してくれよイザドル！」

「ダメですよ、クラウス様。何ごともご自分で、できるようにならないと。私はただの観測者。あなたの方を歌うだけの者です」

「はあー、だよなあ。でもオレ、魔法苦手なんだよなー」「ふつくさ言いながら、クラウスさんは血を振り落とした剣を鞘に収めて、怪我をした腕に掌を

宛^{あて}がう。そしておもむろに口を開いた。

「女神コーラルの御力で、治れ治れえ！」

「……ダメな詠唱の見本ですね」

イザドルさんは苦笑を浮かべた。けれど次の瞬間、クラウスさんの掌^{てのひら}が白い光を発し、あつという間に彼の腕の傷が塞^{ふさ}がる。

「嘘、すごい！ 今は何!?」

私が思わず声をあげると、クラウスさんは憐^{あわ}れみに満ちた顔になつた。

「そんなことまで忘れちまつてるのかよ……魔物が憎いな」

「クラウス様、怪しいですよ。【人間】なら誰しも使える魔法について思い出せないなんて」

「逆に魔族なら絶対に知ってるだろ……イザドル。おまえはいつも疑心暗鬼がすぎるんだよ」

嫉妬する美人をあしらい、クラウスさんが親切に教えてくれる。

【人間】は誰でも生まれる時、女神コーラルから魔力の器^{うつわ}を授かるんだ。^{うつわ}に大きさの違いはあるが、器^{うつわ}があるからには魔法が使える。使えないのは女神コーラルに愛されていない種族、魔族と獣人くらいだ

そう言つて、クラウスさんは蔑^{さげす}るようにフインレイさんを見た。

あれ？ 仲が悪いの？ 一緒に行動しているのに、仲違いしているの？

……怪我を治す魔法だなんてものが使えるのなら、フィンレイさんを治してあげてほしい。

「ん？ 何だよ。何見てんだ？」

「……ええと、クラウスさんは、他人の傷は治せない系？」

「系？ おまえの手の傷か？ それくらい自分で治せよ！」

私も魔法なんて謎の力が使えるのだろうか。そんなときめきに気を取られていると、クラウスさんが怒鳴り声をあげた。

「それにしても獣人ときたら！ まともに^{おとうやく}役もできないのか！ 何だよその様は！」

私は思わずびくついてしまう。

クラウスさんはフィンレイさんを治すどころか、怪我をしたことを責め出したのだ。

魔法で治療してあげてほしい、だなんて言い出せる雰囲気ではない。

「……申し訳ありません」

「目障りなんだよ。何なんだよ、その顔は！」

「えっ、ちょ」

さらに信じられないことに、クラウスさんはフィンレイさんを蹴った。

フィンレイさんの肩についた魔物の噛み傷に血が滲む。痛そうで見ていられない。

やめてと言おうとするのを、フィンレイさんに視線で制された。明らかに、止めるなどいう目で私を見ている。

私が口出しをしたらより酷いことになつてしまふのだろうか？

そもそも、何で仲間割れなんて私が見ている。

ことになつたわけ？

「獣人という種族は魔族の味方なのではありますか、クラウス様？ 心を入れ替えたように見せかけて、やはり今の時代でも」

「イザドルの言う通りかもしれないな……」

「誠に申し訳ございません。至らないこの身をお許しください。フィンレイ、身命を賭して女神の戦士に仕える所存で、決して魔族などの味方をするつもりはありません」

フィンレイさんは絞り出すような声で謙る。

頭を下げているので、上背のあるクラウスさんやイザドルさんは彼の表情は見えなかつただろう。けれど、いくら顔を伏せていても、私からはフィンレイさんの顔が見えてしまつた。

奥歯を食いしばった険しい顔つき、黄金の瞳には炎が煌々と燃えている。

彼の言葉の全てが本心というわけではないのだ。

そして、私が眞実のいくらかを覗き見てしまつたことに気づいたフィンレイさんは、その燃えるような瞳で私を射抜いた。

……見ちやいけないものを、見てしまったのかもしれない。

「まあ、たぶんそうだと思うー」

あの後、クラウスさんはフィンレイさんに興味をなくし、アルソンとやらの町に戻る途中で私の身の上を聞いてきた。その度に、設定が作られていく。

「まずは女神の教会で登録するのが基本だろうに、何を勝手に突っ走ってんだよ。オレが偶然あそこの魔物の巣を駆逐^{くちく}しようと考へついていなかつたら、おまえは死んでたかもしれないぞ！」

「そうだよねー」

「ま、女神の戦士としてその意気込みは買うがな！」

適当にクラウスさんに話を合わせていたら、以下のストーリーに落ち着いた。

私は女神の戦士とやらになるために田舎から出てきたらしい。女神の戦士というのは魔物を倒すために戦う人のことで、正式にこれを名乗るには女神の教会とやらで登録をする必要があるそうだ。私は血氣盛んすぎて登録前に魔物の巣に乗り込んだアホっていう話になつた。

みんなそういう感じでよろしくお願ひしたい。

現在、アルソンなる町に到着し、私は宿場の食堂にて、クラウスさんに夕飯をおごつてもらつているところだ。

「食えよルカ。おまえさつきから全然減つてないじゃないか。オレのおごりなんだから金は気にすんな！」

「クラウスさん、マジ勇者様」

「当然だろ？ 誰より先に伝説の天馬を見つけ、伝説の勇者の再来になる男だぞ、オレは！」

クラウスさんは乗せれば乗せるほど、この世界について教えてくれる。

どうも千年前、魔王^{じょうおう}が突如世界の蹂躪^{じょりん}を始め、【人間】&獣人タッグと魔族の間で大戦争が起きたといふことだつた。その戦いの結果、魔王は追い詰められて空に逃げ出したんだそうだ。剣も魔法も届かないほど天高くまで飛びあがられて、誰もがオロオロ戸惑つていた時、天馬に乗つて現れた人が、伝説の勇者と言われている。

「勇者は天馬を駆つて空を駆け抜けた！ 雲を踏み、雨を降らせて、魔王とその眷属^{けんぞく}どもが逃げようとする。だが、勇者は射程に収めた敵を逃がさない！ 手足のごとく天馬を操り、縦横無尽^{じゅうようむじん}に天馬を翻るッ！」

この勇者と天馬の話は、クラウスさんの口から五回は聞いていた。目を輝かせて熱弁する彼は、無邪気な少年のようだ。

「——オレこそが、次世代の勇者として名乗りをあげる！ 緊急時に伝説の剣を持ち出す許可は得られたし、あと足りないのは天馬だけなんだぜ」

「ヒューー！ さすがクラウスさん。私たちにできることを平然とやつてのけるに違ひない！ そこに痺れる憧れるうう！」

「照れるぜ、ルカ！」

同じ話を繰り返すのは玉に瑕^{きず}だけれど、おだてて褒めれば見知らぬ女の宿代まで出してくれる彼はとても優しい人だ。

だからこそ、彼のフィンレイさんへの仕打ちは異様だった。

「——それではこれより、邪悪な獣人どもを殺した戦士の曲を演奏させていただきます」

イザドルさんは食事を終えてから、ずっと笛を吹いたり歌つたりしている。

笛の節に合わせて、昔の出来事を語るのだ。どこか懐かしいメロディに乗せられているのに、その内容はこの世界に存在する一つの種族を弾圧するもので、えげつない。

どうも獣人と【人間】は歴史のどこかで、仲違いしたらしかった。だから獣人は嫌われている。

憎まれているとすら言えた。

そのせいで、獣人であるフィンレイさんはとても酷い仕打ちを受けていたみたいだ。むしろクラウスさんたちの対応は、【人間】の中では優しいほうであるとすら教えられた。フィンレイさんに頼み込まれたとかで、パーティに入れていたくらいだ。

今、フィンレイさんはここにいない。この町に来る途中の森で姿を眩ませてしまつた。

探しに行きたかつたけれど、向かつた方角がわからず、一人では行けなかつたし、クラウスさんたちに探そうと言うのも憚られた。

それにクラウスさんから逃げ出した可能性がある。

だつて、怪我人相手に足蹴だよ？

クラウスさんもイザドルさんも、フィンレイさんの姿がないことには気づいていたのに、探そうとも口にしなかつた。いなくなつたか、どうでもいいやつて感じだ。

気難しいイザドルさんはともかく、クラウスさんは、私には随分と優しく、気のいい人なのに……

彼は基本的に何もかも、ポジティブに受け取ってくれる。それでも獣人のこととなると、人が変わつてしまつたように恐い顔をするのだ。

私はどうしてもそのあたりのことには納得できないまま、イザドルさんの演奏に耳を傾けた。

彼が黄金の笛を吹くパートが終わる。次は歌い始めるのだろう。

段々、お腹が痛くなつてきた。

何しろイザドルさんが綺麗な声で朗々と歌う内容は、先ほどから、どれもこれも凄惨すぎて笑えない。

獣人を見つけたら殺せ、決して生かすな、彼らは邪悪な裏切り者——こんな歌を平氣で歌うのだ。そして宿の宿泊客や町の人間は、酒を酌み交わしながら陽気に笑顔でその歌に声を揃える。

こんな差別主義者たちに、異世界から来ましただなんて打ち明けられるわけがない。

親切なクラウスさんや、私の分まで宿の手配をしてくれたイザドルさんには悪いけれど、私はこの世界の一般的な【人間】だと嘘をつかせてもらうことにした。自衛のためなので許されたい。

愛想笑いにもそろそろ我慢の限界が来て、歌が始まると、私は席を立つ。

「私、お手洗いに行きたいんですけど、どこですかね」

「ああ？ 宿の裏だる大体」

親切に教えてくれるクラウスさんにお礼を言って、何とか歌パートの前奏あたりで食堂を出た。

宿の外に行くと、ピリリと手の甲の傷が痛む。洞窟の岩で擦りむいた小さな傷だ。風が冷たいからだらう。ここ季節はクリスマスの日本と同じらしい。

宿の看板の前に掲げられたランプ以外の明かりはなく、町は暗かつた。

濃紺の空に無数の銀星が瞬いていて、息を呑むほど美しい。

「……治れ治れ」

不意に思いつき、私は手の甲に掌を当て、半信半疑で念じてみる。すると、鳩尾の奥のほうから何かがするりと抜ける感覚があった。

勇気が中々わかななかつたけれど……手の甲に被せた手をえいつとじけて、見てみる。何と傷が完全に消え失せていた。

「治つた！ ……マジかあ」

この世界の【人間】は生まれる前にコーラルという女神に魔力の器をもらうのだ、とクラウスさんに教えてもらつた。

私はもらつた覚えがないのに、魔法が使えるらしい。

……あれ？ 覚えはない、よね？

この世界に来る直前に、謎の二人組の少女から宝石箱のようなものをもらつた氣はするけれど。

……そういえばあの少女たちは何だつたんだろう？ あの子たち、明らかに怪しいよね？

黒髪のほうの少女に突き飛ばされたせいで、この世界に来てしまつた気がするのだが……

「……女神？ まさか、あの子たちが!?」

双子の可愛らしい少女たちにしか見えなかつたのに？ そんな特別な存在だつたのだろうか。私は、マフラーなんかあげちゃつたよ？

お礼だと言つていたくらいなので、機嫌を損ねてこの世界に送られたのではないと信じたい。いや、むしろ箱を拾つたせいで、連れてこられた？

とにかく、私はもう一度、魔法が使えるか調べてみた。

「肘も治れ治れ……治つた！」

「はは——何だその呪文は？ クラウスの真似か」「ぎやつ」

突然、暗闇から声が聞こえて、思わず私は酷い悲鳴をあげて飛びのいた。

でも、目が慣れるとそこに人がいるのがわかる。しかも誰なのかもすぐに見破れた。

私に声をかける人が、そもそもこの世界には数名しかいない……フィンレイさんだ！

「悪かった……獣人ごときが声をかけて」

「い、いやいやいや！ そんなこと、どうでもいいよつ。無事でよかつた！ どこに行つてたの!?」

「あなたは探してくれていたな。危うくクラウスたちとはぐれるところだつたろう」

私たちの様子を見ていたのか。それじゃあ、クラウスさんが「どこかで野垂れ死んだんだろう

」と言つて全然気にしていない姿や、イザドルさんが「死んだほうが世のためですね」なんて悪態をついていたのも目撃してしまつていたということなの？

陰口を叩く人たちと同行していたので、とても肩身が狭い。

「あの、ごめんなさい、フィンレイさん。探しに行けなくて……」

「いいや、俺はそんなつもりで言つたわけではない。あなたが俺を探しに行つて、一人で森に迷うようなことがなくてよかつた」

「フインレイさんは【人間】の私にも優しい。この優しさをみんなに見てほしいと思う。

違う種族だからという理由だけで彼をボロクソに言うクラウスさんやイザドルさんに、爪の垢をせん煎じて飲ませたい。

「フインレイさんがクラウスさんたちと別行動をするつもりだって初めから知つていたら、私はフインレイさんについて行きたかったな……」

「馬鹿な、どうして!?」

「いやつ、あの、ご迷惑になりたいとは思はないので、嫌で嫌でたまらないのなら全然、教えてくれれば、勿論ついては行かないんだけれど」

「そういうわけではないんだが……俺は、獣人だ」

フインレイさんはなぜか辛そうな顔になる。

彼が獣人だからといって、たったそれだけのことじゃないか、と私は単純に考えてしまう。

……けれど、この世界の人にとっては、すごく意味があるらしい。

洞窟で初めて出会つた時から、フインレイさんは優しかつたのに。それに少なくとも、彼はクラウスさんたちに暴力をふるつていない。

私がこの世界に来て初めて出会つたのがフインレイさんなわけで、彼には縁のようなものを感じている。

あの双子の少女たちも、妙なことを言つていたではないか。

一番最初に出会つた人が、私の運命、だよね?

「……それはともかく、フインレイさん！ 私、怪我を治せる魔法が使えるみたいなんだよね！」

「いや、いい」

「まだ何も言つていないんだけど！」

「俺の怪我を治そうと申し出てくれるのだろう？ 遠慮しておく。知らない」

「えつ？ いらないわけがないよね？ 酷い怪我をしているんだから。まだ治つてない！」

「数が多いが、それほど深い傷はない」

そんなんのは絶対に嘘である。もしかするとフインレイさん比では深い傷ではないのかもしれないけれど、当社比では深手だ。

「本当に覚えていないのか？ 俺たち獣人がヒューマンに忌み嫌われている、その理由を」

「イザドルさんが色々歌つているのは聞いたよ……」

「三百年ほど前に、とんでもない事件が起きた。ヒューマンの間では獣人の反乱、と言われている。獣人の部族の中でもえりすぐりの英雄たちが、なぜかみんな揃つて魔族側に寝返つたのだ。俺もヒューマンに頼み込んで使つてもらつていた間にさんざん聞かされたが、信じられないことにあの歌は事実だ！」

フインレイさんの吐き捨てるような口調に、私はぎょっとなる。

彼の穏やかな顔は一変して、激しい怒りに支配されたものに変わつていた。

【人間】に対して、というわけではない。フィンレイさんの怒りは魔族へ向けられているようだ。「到底信じがたい話だ……女神コーラルの敵である魔族と結ぼうとするなど！ 何か理由があつたに違いない。だとしてもありえてはならない事態だが……ヒューマンの妄言だと考える若い奴らもいる。そいつらが羨ましい、俺もそう思つていたかった……」

大昔に起こったことのせいで、【人間】と獣人はいがみあつてると、クラウスさんとイザドルさんからも、耳にタコができるほど聞いていた。

獣人はかつて【人間】側だつたけれど裏切つて魔族につき、また【人間】側に戻つてきたそうだ。そして、一度魔族についたために嫌われるようになつた。

今は【人間】陣営なのだから水に流せないのかと私は思うんだけど、ダメらしい。クラウスさんもイザドルさんも、再び獣人は裏切るかもしれないと考えている。

……三百年前の事件で、当時の人はもう誰も生きていなかつた。……今を生きるフィンレイさんには、関係のない話じやないか。

許せる時は来ないのだろうか？

「獣人は魔物を討伐する際の凹に使われ、店には入れない。町にすら入れてはもらえないのもよくある話だ。安易に傷つけられ、殺されることも——」

「わかつてる——この世界の事情は嫌つてほど説明された！ でもとりあえず、傷は治させて！」

「つ！」

「何で避けるの？ 治せるみたいだから。治させて、頼むから！」

自分にできることがあるのに、辛い思いをしている人を放置しておくなんて無理。

たとえフィンレイさん本人が大丈夫だと言つていても、私が大丈夫じゃない。見ているだけで痛いのだ。

「正気か？ ヒューマンが俺のような獣人の怪我を——いや、正気ではなかつたな」

「失礼だね！ それでも治すけど！」

「治すつもりがあるのならば、そのとんでもない呪文をどうにかしろ。具体的な想像はできているか？ 何も考えずに入れてもらつてもいい？」メモを取つても？

「……どうして俺が、ヒューマンに魔法の使い方などを教えなくてはならないんだ？」

「本当に何もわからないの！ お願ひします！ 教えてくれたら恩に着る！」

手を合わせて拌むと、不承不承と言つた顔つきでフィンレイさんは説明してくれた。

魔法は、呪文を唱えることで発動する。魔力の消費量は、起こす事象の大小に比例する。しかし手順を踏めば消費は抑えられる。

魔法によつて引き起こされる現象を上手く想像できると、魔力を節約できるらしい。

「あなたの想像を、呪文を介して女神コーラルが読み取る。そして、その器から捧げられる魔力によって女神の業があらわされる。あなたの器の大きさによつては使えない魔法もあるだろう」「本当に私、いつの間に魔力の器なんて手に入れたんだろ……」

「この世に生まれる前に決まつてゐる」

「フィンレイさんが怪訝な顔で言う。

いや、この世界の人的にはそうなんだろうけど。やつぱりあの少女からもらった豪奢な箱こそが、魔力の器と呼ばれるもののよう気がしてならない。

「もしかして、その女神コーラルって女の子じゃない？ これぐらいの背丈で金髪の」
「……俺たち獣人に伝わる姿と、ヒューマンに伝わる女神の姿は違うようだな。何が真実なのかは女神の御姿を見たことのある者にしかわからないだろう。だが、金髪だというのは伝承の通りだ」

金髪の少女のほうが女神コーラルの可能性が高い。ならば、黒髪の子の名前は何だ？
少女からもらった宝石箱はなくしてしまったと思っていたけれど、私の中にあるに違いない。あれがおそらく、魔力の器だ。だから私は魔法が使えるのではないか？」

まあいい、今は魔法を使ってフィンレイの怪我を治すのが先だ。

魔法が使えれば、彼の傷が癒やせる。

「ちょっと触つてもいい？」

「……いいと言う前に触つている」

フィンレイさんの手を取ると、怒ったような顔をされた。

離したほうがいいかなとも思つたんだけど、触つたほうが治療のイメージがしやすいんだよね。

それに手を振り払われはしなかつた。反吐が出るほど嫌だというわけじゃないに違いない。

フィンレイさんの手は、とてもなく大きな手だ。少し伸ばされた爪は先が鋭く尖つていて、興味本位で触ると、ふつりと私の指に刺さつた。

「あ、イタ」

「おい！ 何をしている！」

「ごめん、勝手に触つてたら刺さっちゃつたみたい。それじゃ、フィンレイさんの怪我を」

「いや、自分の怪我をまず治せ！」

「こんなの怪我の内には入らないよ」

「いいから、さつさと治してくれ。そんなに簡単に怪我をされては心臓に悪い」

フィンレイさんは怯えた顔をしていた。

彼の身になつて考えてみる。確かに私も、自分の爪に触るくらいで怪我をされたらすごく怖い。か弱すぎだ。

だけどフィンレイさんの爪が鋭いのが悪いんじゃない。そう考えていると、彼も自分の爪の鋭さが気になつたらしく、ぎゅっと掌に爪を立てていた。
けれど彼の掌には全く傷がつかない。

……獣人というのは頑丈なのだろう。

結局、フィンレイさんに比べて、私が弱すぎるのが悪いようだ。

またもや無意味な心配をさせてしまい、本当に申し訳ない。

「それじゃ指治れ。……はい、これで今度はフィンレイさんね！」

「……本気で、俺の怪我を治すつもりなのか？ 僕は獣人だというのに？」

「あーうん、色々話は聞いたよ。でもね、私にはあんまり関係ないとしか思えなかつたんだよ

ね……目の前に寒そうな格好をしてる女の子がいたらマフラーをあげるし、傷ついてる人がいたら怪我を治したい。それは相手が誰だろうと関係なくね」

「たとえ相手が女神だろうと獣人だろうと、それ自体は大した話ではないはずだ。

「フィンレイさんだって、洞窟にいた私を助けてくれたでしょ？」

「あれはただ——あなたが邪魔だから入り口へ誘導しただけだ」

「酷い言い草！　だけどまあ、私は助かつたよ。おかげさまでね、ありがとう」

やつとお礼が言えてホッとした。

あのまま洞窟にいたら、フィンレイさんのように傷だらけになっていたら、フィンレイさんこそ、私の命の恩人だ。

「おい、気をつけてくれ。俺の爪に触れないように」

怪我を治すために手を取ると、心配されてしまった。情けない顔をしているフィンレイさんを見て笑ってしまう。やる気が出てくる。

正直、自分の手の甲のかすり傷を治すだけで割と疲れた。だからフィンレイさんの怪我を治すのはかなりしんどいと思う。

それでも、頑張って治そうという気持ちがむくむくと湧いてきたのだ。

「怪我をすると……血中の血小板が……かせんぱん蓋ふたができる……」

小学生の時に理科で習ったことを思い出しながら、人間の身体の仕組みについて考える。

想像するつて、こんな感じでいいのだろうか？



わからないなりにやつてみる。

フィンレイさんの手をにぎにぎすると、ピクッと肩を震わせていた。

血行促進マッサージが怪我を治すのによさそうだと思ったんだよ。他意はない。

「あれやこれやな感じで、治れ治れー」

「これは……！」

フィンレイさんが驚いた声をあげるので、私は瞑ついていた目を開ける。けれどすぐにはその変化がわからなかつた。その腕の上に固まつてある、血をそつと手で払う。

すると、血の下にあつたはずの傷は跡形もなく消えていた。

魔力の消費量は危惧していたほどではない。疲れていないのは想像が的を射ていたからか。

「やつた！ 他の場所はどう？ 服を脱いで見せて！」

「つ、わ、やめろ！ 破廉恥な！」

いたいけな少女のように服をめくられるのを嫌がつてゐるフィンレイさんを無視して、私は無理やりその腹を見た。一番傷口が深かつたところ——瞬間、支えた時にたくさん血が滲んでいた場所だ。

そこにはただ、まっさらな肌があるだけだった。くつきりとした腹筋の凹凸は美しく均整が取れていて、外国の美術館に飾られている彫刻みたいだ。

「ああ、よかつた……！」 もう、一時はどうなることかと

「ルカ、泣いているのか？」

そりやあ、泣きもする。目の前に酷い怪我をした人がいて、その人は私を助けてくれた恩人だ。それなのに、救急車を呼ぶ手段もなく、近くの人も助けてくれない。

私が何とかするしかない状況で、できるかもしれない——けれど本当にできるとは信じられないがつた。私らしくもなく弱気になつていていたのだ。

「泣くな……ルカ。俺などのために、泣いてくれるな。頼む」

「ごめん、鬱陶しいよね。この世界の人なら、当たり前にできることなのにね。勝手にびっくりしているだけだから、気にしないで」

「鬱陶しいなど、まさか、そんなふうに思うはずがないだろう」

フィンレイさんは途方に暮れたような顔をしている。

何でそんな顔をするの？

フィンレイさんに恩は返せた。この世界においての私の立ち位置も、何となく知つた。

これからどうしたらいいのかはわからないけれど、明日からの異世界リアル遭難ごっこにおいて、この魔法の力が大活躍するに違ひない。

あの双子の女神らしき子たちを探して、元の世界に帰してくれようお願いしなくては。

あの子らを見つけるまでの大冒険に、魔法はきつと欠かせない。

そんな想像もつかない未来に、私のほうこそ呆然としてしまう。

「……あなたは、これからどうする？ 行くあてはあるのか？」

フィンレイさんの言葉に、首を横に振つた。そんなものはない、だから、すごく不安だ。

「ないなら女神の戦士として戦いながら流浪の旅をすることになるだろう。だが獣人のために泣いているようでは、これから先どこへ行つても生きづらいはずだ……そんな顔をしないでくれ」「あ、ええと、ごめんなさい。別にフィンレイさんに迷惑をかけようだなんて全然考えていないから！」

綻るような顔でもしていたのかもしれない。困ったように目を逸らされた。

ものすごく恥ずかしい。図々しい奴だと思われたくないでの努めて明るい声を出す。

「大丈夫、大丈夫！ 魔法も使えるみたいだし、何とかなるって！ まずはどこに行こうかな。フィンレイさんのおすすめは？」

「……今すぐに町を出たほうがいい」

「何で？」

「質問はしないでくれ、今すぐだ」

「いやつ……ちょっとそれは難しいかな？」

苦渋に満ちた顔のフィンレイさんのおすすめは、中々の苦行だ。

今時間はおそらく、夜遅い。私の携帯は気づいた時には事切れていた。まだ生きている腕時計を見るに、既に十時は回っている。

洞窟からの帰り途中、旅行サークルでも経験したことのない本格的な野宿をし、あれから一日経っている。

街灯に照らされた明るく安全な日本の夜道だつて、あまり歩きたくない。それなのに、街灯は皆

無む、地面はデコボコ、魔物とやらがどこから飛び出すかわからない闇の中をさまよいたいわけがなかつた。

けれど、フィンレイさんの顔は真剣そのものだ。

「無理だつて、眞面目な話」

「無理でも何でも、さつさと行け！」

「何でいきなり怒るかな！ 唐突なブチ切れが私を襲う！ よくないよ、そういうの！ 女の子にモテないよ」

「ふざけている場合ではないんだぞ！」

牙を剥き出しにしてフィンレイさんが怒鳴った。金色の目が見開かれ、顔が恐い。

「いやいやいや……無理だつてホントにダメ。舗装されたアスファルトの道でだつて転ぶのに、こんな歩きにくい田舎道なんて！ それに夜だもん、たとえ魔物の出ない道でも死ねるよ、私。あつという間の命だよ？ 何考えてるの？」

「……ツ！ 馬鹿女め……！」

「酷い！ ちょっと仲よくなれたと思ったのに！」

「これ以上言うのは、仲間への……！ 一族への裏切りとなつてしまふ……！」

ぎり、という音が聞こえて、私は思わずフィンレイさんの顔を見た。そして、めちゃくちゃビビる。

唇を噛みしめすぎて、噛み切つていて。

「ちょっと、血が出てる！ 口を噛むのやめなつて！ 一体どうしたの」

「あなたに、触れなければよかつた。……触れさせなければよかつた！ まさか本当に俺の傷を治すなんて……！ 傷を治させなければ、言葉を交わさなければ、こんなことには……ッ！」

「せつからく頑張つて魔法を使つたのに、どうしてそんなこと言うの？」

命の恩人にいきなり嫌われすぎて、状況の変化に追いつけない。

親切心でやつたことが何か裏目に出たようだけれど、その理由がさっぱりわからなかつた。でも痛そうで見ていられないからだよ……」

思わず涙目になる私に、フィンレイさんはさらに苦々しい顔をする。

異世界の常識は、私にはわけがわからないものの、命の恩人にこれ以上の迷惑はかけたくない。彼が言うのなら、今すぐ町から出て、あてどなく草原でも森の中でも闇に紛れた道を歩こうか。どうせ何の予定もないのだから、道に迷つたつて構わないだろう。

そう思った時、ヒュウと火薬が弾けるような音が聞こえた。

音のした空を見上げると、墨をぶちまけたような漆黒の空に、鮮やかに火薬が花開く。

「あつ、花火だ。たーまやー」

その美しさに、私は感嘆の声をあげる。

「大馬鹿にもほどがある！ あなたも、俺もな」

フィンレイさんはいきなり大声で自分を貶し出した。私もついでに貶されている。

「一体どうしたのかと思いつつ見ていると、彼は懷から筒を取り出した。その黄土色の筒より伸びる紙縋りにランプの火をうつして、空に掲げる。

すると、爆音と同時に花火が飛び出す。

「おおっ、第二弾！」

「何を喜んでいるんだ？ あなたにはこいつの意味がわからないのか！ ……わからないんだつな！ そうだろうさ」

勝手にキレているフィンレイさん。耳が痛くなるので、前もって宣言した後で打ち上げてくれ、と言う隙すら与えてくれない。

「俺はフィンレイ・ゴールデンギープ」

「え？ ああ、前も聞いたけど。私は佐倉瑠香です。名前は瑠香ね。よろしくお願ひします」

「あなたの名前なんて今はどうでもいい！ 俺の名をしかと覚えておけ！」

何で私が一方的に覚えなくちゃならないの！

どう抗議しようとしたけれど、眼前に迫る彼の迫力に驚いて言葉に詰まつた。

「へ？」

私の視界の端で、フィンレイさんが口を大きく開く。

――白い歯。赤い喉内。

両肩をぎゅっと掴まれた次の瞬間、首に激痛が走る。

「いただだだだだだだだッ！ 痛――――い!!」